

＜株式会社エフエム東京 第 521 回放送番組審議会＞

1. 開催年月日：令和 7 年 9 月 2 日（火）
2. 開催場所：エフエム東京 11 階大会議室
3. 委員の出席：委員総数 6 名（社外 6 名 社内 0 名）

◇出席委員（6 名）

ロバート キャンベル委員長	佐々木 俊 尚 委員
松 田 紀 子 委員	山 口 真 由 委員（リモート）
柴 崎 友 香 委員	福 里 真 一 委員

◇欠席委員（0 名）

◇社側出席者（6 名）

唐島 夏生	代表取締役社長執行役員
内藤 博志	取締役執行役員コンテンツ事業局長
宮野 潤一	執行役員編成制作局長
砂井 博文	編成制作局制作部長
蘭 有紀子	編成制作局編成部長
原田 洋子	編成制作局報道・情報センター部長

◇社側欠席者（0 名）

【事務担当 宮野放送番組審議会事務局長】

4. 議題：番組試聴 （55 分）
TOKYO FM、広島 FM 共同制作特別番組
『80 年の越境～ヒロシマの隣町から～』
2025 年 8 月 24 日（日） 19:00～19:55 放送

＜議事内容＞

議題 1:最近の活動について

■ 6 月度聴取率調査結果

ビデオリサーチによる 6 月度ラジオ聴取率調査結果（調査期間：6/9-6/15）が発表されました。6:00～24:00 の週平均におきまして、以下 3 区分すべてにおいて、TOKYO FM は在京単独トップを獲得しました。

個人全体で 22 年 4 月度以来、同率を含めトップを維持できており、連続記録は、20 期に達しました。

- ・ 男女 18～49 才（コアターゲット） ※単独首位 / 22 年 2 月度より 21 期連続
- ・ 男女 12～59 才 ※単独首位 / 前回 2 位より首位奪還
- ・ 男女 12～69 才 ※単独首位 / 22 年 4 月度より 20 期連続

■ 『マイナビ 閃光ライオット produced by SCHOOL OF LOCK!』開催

TOKYO FM をはじめとする JFN 全国 38 局で放送中の 10 代向け人気番組『SCHOOL OF LOCK!』がソニーミュージックとタッグを組み、10 代アーティスト限定の音楽フェス『マイナビ 閃光ライオット 2025 produced by SCHOOL OF LOCK!』を、2025 年 8 月 7 日（木）Zepp DiverCity (TOKYO) にて開催しました。

当日は応募総数 3,129 組から勝ち上がった 9 組のアーティストが熱いパフォーマンスを披露。審査の結果、グランプリは、東京都発の 19 歳 4 人組ミクスチャーバンド「めっちゃ美人」、スペシャルサポーター特別賞は岩手県在住、13 歳のシンガーソングライター中村旭（なかむら・あさひ）が受賞しました。

会場の Zepp DiverCity (TOKYO) には、のべ 1,900 人のリスナーが来場、X、YouTube でのライブ生配信を累計 57 万人超が視聴するなど、大盛況となりました。



▲MC をつとめた「SCHOOL OF LOCK!」こもり校長、アンジー教頭



▲応援アンバサダー 乃木坂 46 賀喜遙香、井上和

■『ダレハナ夏祭り 2025～ザワザワサマー～』開催

TOKYO FM で毎週月曜～木曜午後 1 時から放送中の生ワイド番組『山崎怜奈の誰かに話しかったこと。』では、番組恒例の夏のイベント『ダレハナ夏祭り 2025』を 8 月 16 日（土）東京都大田区の大田区民ホール・アプリコにて、開催いたしました。昨年のおみうりホール（キャパ 1,100 名）から規模を拡大し、約 1,300 名のリスナーが参加しました。

ゲストには、元桜坂 46 の菅井優香、声優の花澤香菜、8 人組ユニット・ダウ 90000、グランジ・遠山大輔、元日向坂 46 の潮紗理奈が登場。出演者が架空のラジオ番組を作るなど、この日限りの特別コーナーや、ダウ 90000 のコント、来場者を巻き込んだクイズ大会など、番組ならではの企画を実施。最後は、来場者と一緒に大合唱するなど、リスナーと一体感に包まれるイベントとなりました。



▲会場のみなさんと集合写真



▲オリジナルグッズ

議題 2：番組視聴

【番組名】

TOKYO FM、広島 FM 共同制作特別番組『80 年の越境～ヒロシマの隣町から～』

2025 年 8 月 24 日（日） 19:00～19:55 放送

【番組概要】

戦後 80 年を経て、戦争や被爆の実相を当事者が語ることが難しくなりました。当事者と呼ばれる方々が語っていることも実際は家族から聞いたことを自分事のように語り継いでいるのが実情です。

また、時間ではなく、距離を隔てた場合、当事者性をどう考えたらよいのでしょうか。広島市から 20 km 離れた呉市では、原爆そのものの被害はありませんでしたが、市民は隣町の惨状をそれなりに近くで見えており、同じ「ヒロシマ」県民としての意識もありました。距離があり直接被害を受けなかったら「当事者」ではないのでしょうか。

今年呉市は、防衛省の「複合防衛拠点」として町を整備する計画を発表し、有事の場合は戦争の拠点となっていく道を再び歩むことになりました。

今回、番組では、広島から距離を隔てた呉で生きる人々が 80 年という時間も経て、原爆投下をどう感じているのかを取材し、「当事者」であるというのはどういうことなのか、「語り継ぐ」ということはどういうことなのかを改めて考えました。

進行：後藤亮介（TOKYO FM アナウンサー）

出演：直野章子（京都大学教授）

伊藤剛（アソボット代表）

東京外国語大学大学院平和構築・紛争予防専修ピースコミュニケーション講師）

坂田明（呉出身 サックス奏者）

呉の方々



▲呉の軍港とスタッフ

【委員の意見および社側説明】

（「○」委員意見／「■」社側意見）

○この番組がテーマとしていた、当事者性や距離感という話は、例えば小説でも、誰かの話を別の誰かが書くことが中心だったりするので、そこで当事者性とか、当事者の言葉を他の人が書いていいのかとか、そういうことがあり、すごく意義深い番組だと思った。平和教育とはいうけれど、戦争がどういう経緯でこうなったとか、そういう部分が資料館でも、調べていても全く語られないことが気になった。日本にある戦争関連の資料館では、空襲や被害の部分がほとんどで、その前後はあまり語られてこなかった。最近、ある平和館では、入館するとまず平和とは何かという展示から始まっていると聞いた。実際に戦争を経験している人も少なくなってきた、そこから考え直さないといけないという動きがあるのだと思う。この番組を聴いて、そのように考えている人が増えているのかなと思った。

○被爆した人がその後、分けられてしまう話、クロアチアに行った人の話、伊藤氏の平和教育の話など、1つ1つがすごく充実した内容で、知らなかったり考えさせられるものが多かった。すごく聴きごたえがある反面、1時間で納めるのは難しかったのではないかと感じた。後半でアナウンサーが説明的にまとめてしまっているところがあった。

○8月のジャーナリズムについては、8月だけでなくもっと他の時期にもやった方がいいというのには同意しつつも、8月になると特別番組や特集がたくさんあり、そこで興味を持ち、いろいろなことを知って来たということもあるので、特集をすること自体には意義があるので続けてほしいと思う。

○太平洋戦争とウクライナ侵攻が同じくらいの期間になっていると番組で聞いてハッとした。太平洋戦争以外でも日本は長らく戦争をしていて、8月のジャーナリズムが、その他の戦争を見えなくしているのではと気になった。

○8月のジャーナリズムについて、前々から指摘されていたけど議論があまりメディアではされてなくて、そこに非常に鋭く切り込んでいるのでとても秀逸な番組だと思った。8月のジャーナリズムの何が問題かという、8月しか報道しないことではなくて、8月報道の中心が語り部報道になっているということ。戦争体験者である語り部の話はもちろん大変貴重だが、さすがに戦後80年になると、途中でどんどん記憶が改ざんされていることも指摘されている。喋っているうちにリアリティがなくなり、頭で作り上げた物語に偏ってしまうこともある。現在、実際戦地に赴いた人は100歳以上。戦後90年の時にはもう誰もいなくなるとも言われている。現状、今語り部として喋っている人も、当時は子どもだったり、幼児だったり、その人たちが本当に語り継ぐことのできるのか疑問も残る。メディア

では語り部 2 世といって、語り部の子どもが喋っているのを見かけるが、これは完全に固定されたことを話す、もはや琵琶法師になっている。そのことに意味があるのかという声も聞く。そんな状態がずっと続いていることに対して、アンチテーゼが語られてこなかったということもある。今回の番組で評価したい部分は、コミュニケーションの専門家・伊藤剛のコメントをちゃんととっているところ。日本では平和教育が歴史教育と道徳になってしまっているという指摘があつて、平和を作るためにどんな力が必要なのかは、道徳から学ぶことはできない。実際、語り部報道では戦争の悲惨さを伝えましょう、になっている。そこには、主に戦争の被害や悲惨さがあつて、それを伝えることが戦争を止めることになるかとされている。実際に、ウクライナ侵攻報道を見ていると、仮に侵略戦争を起こされたら我々はどう向き合えばいいのかという視点が、語り部報道からは浮かび上がってこないという問題点。空襲の悲惨さは非常にミクロな視点で、戦争は何だったのかというマクロな視点が欠如している。これをもう一度問い直す、という視点を盛り込んだのはとても秀逸な番組だったと思う。

○呉市に注目したのがとてもいいと思う。広島県でありながら原爆の直接の被害はほとんどなく、かつ明治時代以降はずっと軍港で、現在も自衛隊の海軍の重要な拠点があるところ。長年、軍事的なところと寄り添ってきた街。番組の終盤で呉市に住んでいる人にインタビューをしていて、年配の人が「防衛力は必要だ」「呉は軍港であり軍都なので宿命だ」と答えていて、それが非常に重くて。こういうリアルな感覚ともっと向き合ってもいいのではないかと思った。

○「戦争反対」と叫ぶだけではなく、戦に突き進んだ人もいるし、それを宿命だと思った人もいる。このような感覚の多様性と向き合うことが本来のジャーナリズムの視点だと思う。

○1 点だけ指摘すると、最後にアナウンサーのナレーションで「戦争体験者がほとんどいなくなった。頼りになるのは、そうした人に触れた経験を共有して、想像を深めていくことによって新たな当事者が生まれる気がします」と言っていて、これはある意味、語り部 2 世を肯定していて、ここはもう少し突き放しても良かったのかなと思った。

○「8 月ジャーナリズム」と揶揄されるけれど、やらないよりはやった方がいいという覚悟でこの番組があるんだなと思った。一番興味深かったのは、伊藤剛氏が、「平和が大事とか戦争がダメだとか、いくら教育してもそれはみんなわかっているからしょうがないよね」と。それより、平和教育というのは、「嫌いな人とずっと対話して、それを続ける粘着力を鍛えることだとか、空気に流されずに毅然として上司に意見を言う力を鍛えることが本当は役に立つ平和教育なのではないか」と言っていて、これはなるほどと思った。

○長崎出身だが、出身地は被爆地からは距離がありこの番組を自分事のように聴いた。長崎では原爆投下のあった 8 月 9 日に必ず児童生徒は投稿せねばならず、平和集会に参加して、ケロイドの写真は黒焦げの少年の映像など、以降トラウマになるようなものをたくさん見るということがある。不気味だなど思いながら参加していたけれど、ある時、グッと当事者意識が芽生えたことがあった。子供ながらに思ったのは、気持ち悪いじゃなくて、その状況に目を背けてはいけないということ。被爆地ではない隣接市出身だが、その教育は非常に強く今も活きている。「8 月のジャーナリズム」だろうがなんだろうが、ちゃんと伝えるということには意味があると感じる番組だった。

■大変参考になる意見をありがとうございました。

6.議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送番組「ドライバーズインフォ」

9 月 27 日（日）5:55～6:00 放送

② 書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き

③ インターネット:TOKYO FM ホームページ内 <https://www.tfm.co.jp/>